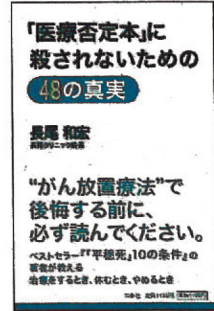


「医療否定本」に殺されなかったための48の真実



(扶桑社・1155円)

否する患者さんが急増している。手遅れになってしまったケースまで出てきている。自分のその選択に後悔しながらの真つ最中だった。

患者には納得の道選ぶ「権利」

手術も抗がん剤も無意味、早期発見・早期治療は無駄、がんは放置がいちばん、治療しなければ痛まない、血糖値も血圧も高いほうがいい。こうした「医療否定本」の教えをつのみにして、治療を拒

長尾和宏著

亡くなっていった人もいる。自己責任という一言で終わらせてしまうには、あまりに重い現象ではないだろうか？ 著者の長尾和宏氏はベストセラー『「平穏死」10の条件』（ブックマン社）で「平

現代医療が万能でないことは事実である。がんとの向き合いはもちろんケース・バイ・ケースだ。「医療否定本」がこれだけ支持を得る背景に、根強い医療不信感情が存在することも確かである。し

告知から2つ季節が巡り、私の家族は日常生活を取り戻している。昨今の「医療否定本」ブームで不利益を被らないよう、ぜひ本書をご一読いただきたい。（扶桑社 書籍編集部 小川亜矢子）

かし、正確性を欠く情報によって、患者が望み、納得する道を選ぶ「権利」が奪われてしまうようなことは、決してあってはならない。「医者にも医療否定本にも殺されてはいけない。患者よ、もっと賢くなれ」と、本書の根底にあるのはそんな確固たるメッセージだ。



日本人はなぜ特攻を選んだのか



(徳間書店・1050円)

尊い犠牲が後世に遺したもの

来年はレイテ沖海戦から70年。この戦いで初めて神風特別攻撃隊が編成され、以後、沖繩戦から終戦に至るまで、特攻により多くの若者の命が失われました。戦後、特攻は「軍国教育の洗脳によって行

黄文雄著

はどう捉え、いかなる影響を及ぼしたかを論じています。そこから見えてくるのは、日本での一般の評価とは大きく異なるものです。仏作家で文化大臣を務めたアンドレ・マルローは「日本は戦争に敗

とまで記しています。特攻基地があったフィリピンでは特攻隊の話に感動した現地の人たちの尽力で1974年に記念碑が建てられたそうです。さらに本書では、ビルマ

家バー・モウらの証言を紹介しながら、特攻は欧米列強の植民地だったアジア各国にも衝撃を与え、戦後の独立を導いたことを検証しています。一方で、「統率の外道」と呼んだ特攻をなぜ日本はあえて選んだのか、他国との死生観の違いや精神史を比較した考察も行っています。

のマナー・ルから考える

本 大倉幸中 (新評)

報じない「韓国」の馬脚で、どんな「馬脚」かが「朴槿恵大統領」の「婦」の管理者だった。11月6日、韓国国会の野党の女性議員がこう「ここに、『基地村』法的なレベルを超え、非国家が主導したという証言す」

1977年当時、

話 題

昔